

『東方』二九六号より

## 生き返った方言辞典

村上 嘉英(天理大学)

このたび王順隆氏が台湾総督府著作兼発行『台日大辞典』上巻(一九三一年、本文八七七頁)、下巻(一九三二年、本文一〇四三頁)を全面的に編纂し直し、『新編台日大辞典』として上梓された。については、書評に先んじて、底本である台湾総督府『台日大辞典』の編纂背景とこの辞典の特徴について述べることにする。

日本は一八九五年、清より台湾の割譲を受けた。その時この地では、後に台湾語と称せられる南部福建方言、客家方言、原住民使用のマレーポリネシア系諸語が通用していた。日本人は植民地を初めて経営するに当たり、まず政策を遂行する一環として、当時この地の八割以上の人が話す南部福建語の学習と研究にも取り組んだ。

その中心的な役割を担ったのが、伊沢修二を初代学務長とする台湾総督府学務部であった。伊沢は、台湾領有直後の六月に着任すると直ちに日本語教育と台湾語の研究に取り掛かった。八月には早くも日台対訳の教科書『日本語教科書』、更には翌年の二月には日台対照教科書『新日本語言集甲号』を刊行した。以下、学務部が初期に刊行したこの外の書籍の名を挙げる。

『訂正台湾十五音及字母表 附八声符号』

一八九六年十一月。(台湾語字母表)

『台湾十五音及字母詳解』

一八九六年十一月。(台湾語字母表)

『台湾適用小学読方作文掛図教授指南』

トップページにもどる

台湾総督府原著／王順隆新編

『新編台日大辞典』

B5判・一四六八頁・四八、〇〇〇円



一八九六年十一月。(日台対訳教科書)

『台湾適用会話入門』一八九六年十一月。(日台対照)

『台湾適用国語読本初歩上巻』

一八九六年十一月。(日台対訳教科書)

『台湾適用作法教授書』

一八九六年十一月。(日台対訳作法教材)

『国語教授参考書 三冊』

一八九六年十二月。(日台対訳教案)

『台湾適用書牘文教授書 上下二巻』一八九七年三月。

伊沢はアメリカで師範教育と理学を修め、一八七八年に帰国して東京師範学校校長、更には東京音楽学校校長、東京盲啞学校校長も兼任し、日本の近代教育の基礎を固めた。また、カタカナによって中国語(官話)の注音方式を編み出し、『日清字音鑑』(一八九五年六月刊。官話常用字

四千余字に注音)の著者としても知られる。

伊沢式の中国語(官話)注音方式、南部福建地方民間音韻書『十五音』、キリスト教宣教師による先駆的な南部福建語辞典などの上に立って台湾語のカタカナ注音方式がまず制定され、日本領有時代を通じて、官民併せて百数十種の台湾語学習書、七種の台湾語辞典、五種の台湾語専門雑誌が出版された。

外国語学習には教科書や文法書は言うまでもなく、語彙数の多い信頼のおける辞書が不可欠である。このため、台湾総督府は前後五種の台湾語辞典を発行した。いずれも主編者は小川尚義である。小川は一八九六年に東京帝国大学を卒業し、指導教官上田万年の推薦を受け同年十二月に渡台した。これは上記の伊沢が台湾語と原住民の言語の辞典を編纂するため、言語学を専攻する青年を上田に求めたからである。

小川は着任すると直ちに『日台小字典』の編纂に着手した。これは上田万年が選択した二五〇〇語の日本語を台湾語に対訳するものであった。助手として日本人一人と台湾人二人が当たり、僅か二年で刊行された。緒言二頁、本文六二八頁、附録八頁。

次に小川が主編したのは『日台大辞典』である。小川とは別に学務部では神津仙三郎がJ.Macgowan“English and Chinese Dictionary of the Amoy Dialect”(一八八三)の訳出を進めていた。しかし、神津は前半を訳したところで病没してしまう。小川は『日台小字典』刊行後、この訳を完成させ、続け、C.Douglas“Chinese-English Dictionary of the Vernacular or Spoken Language of Amoy”(一八九九)の訳出をして基礎資料とし、別を選んで日本語約五万語と付き合わせて、辞典編纂作業を進めて

トップページにもどる

いった。この編纂作業に加わったのは、神津以外に日本人六人と台湾人四人であった。こうして、神津が筆を染めて以来、十一年の歳月が費やされ、『日台大辞典』が一九〇七年三月に発行された。全一五〇七頁。二一二頁にわたる緒言は中国現代言語学の台頭する以前のものであるが、学術的には当時の最高の水準を示している。

次に総督府が遠大な企画によって、小川の主編の下に二十余年の歳月と多大な経費及び尽力を傾注して完成させたのが『台日大辞典』二巻である。これは、序一頁、凡例二頁、台湾語の発音八頁、索引表二頁、本文上巻八七七頁、下巻一〇四三頁、全一九三三頁の正に大辞典というに値するものであった。編纂事業に従事したのは、日本人三人、台湾人七人で、この他に動物、植物、鉱物、薬物疾病などの専門家を動員している。

この大辞典の最大の特徴は、当時の台湾において行われていた南部福建方言系の言語(台湾語)について、最も普通なるものを見出し語で八一九八一語収録したことにある。若干の文言語彙も含まれるが、有史以来、最大の中国方言口語辞典と言える。また、廈門音を標準音としながら、台湾で保存されている泉州音や漳州音についても煩をいとわず記録している点や、豊富な例文とイラストもこの大辞典の実用的な価値を高めている。だから、その規模と学術的水準から鑑みて、実用方言辞典としてのみならず、第一級の方言研究資料としても有用であると言っても過言ではない。

それにもかかわらず、この大辞典は江湖の喝采を博すことはなかった。上下巻で定価二十円という当時としては高値であったし、なによりも音韻学的な正確さを追求するあまり、カタカナ標音に符号を多用したこともあり、一般に

なじみ難いところがあったと思われる。

王順隆氏はこの大辞典が台湾語辞典の金字塔と考え、独力で全面的に編纂し直し、『新編台日大辞典』の名で刊行した。その特色は以下の通りである。

①カタカナ発音表記をローマ字化し、語順をアルファベツト順に並べ替えた。

②底本の見出し語や語釈及び例文を完全に収録し、*‘thue<sup>3</sup> lang<sup>5</sup> si<sup>2</sup> 替人死<sup>2</sup> thiam<sup>1</sup> iu<sup>5</sup> hui<sup>1</sup> 添油香<sup>4</sup> sou<sup>1</sup> khai<sup>1</sup> 寮開<sup>4</sup> ti<sup>5</sup> kha<sup>1</sup> pua<sup>n3</sup> chhiu<sup>2</sup> 纏脚絆<sup>4</sup> sio<sup>1</sup> khiam<sup>3</sup> che<sup>3</sup> 租欠債<sup>4</sup> bang<sup>2</sup> a<sup>2</sup> hui<sup>1</sup> 蚊仔香<sup>4</sup> など現在、日常でよく使われる台湾語を新たに八八八語を増補した。*

③例文、語釈等を数千箇所以上増補し、その部分は標記した。例えば、*‘chia<sup>1</sup> thau<sup>5</sup> 車頭<sup>4</sup>* は底本では「汽車の駅。停車場」としているが、『新編台日大辞典』では「(1)補汽車や自動車などの前方。(2)補汽車などの機関車。自動車などのフロント。(3)汽車などの駅。停車場」と増補した。

④発音の変調と軽声を逐語ごとに表示した。

⑤現代台湾における常用語彙二一〇〇〇語を明記した。

⑥底本の日本語旧文体(旧漢字や仮名遣い)を現代標準語のそれに書き替えた。

⑦序文として天理大学村上嘉英教授「日本人の台湾語学習と研究の事始め——序に替えて」(二〇頁)、東京外国語大学樋口靖教授「台湾語辞典をめぐるよしなしごと」(五頁)を掲載した。

⑧インディアペーパーを使用して軽量化を図り、底本の二巻を新編では一巻にし使いやすくした。

⑨インターネットを通じて永続的に正誤表を更新することにした。

トップページにもどる

王順隆氏は筑波大学博士課程で言語学を修めた前途有為な言語学者である。自己の母語である台湾語とまた台湾の伝統文化に対して、限らない慈愛を注ぎこれまでも後世に残る数多くの業績を積み上げてきている。その成果 <http://www32.ocn.ne.jp/~sunliong/tai-jit.htm> をご覧頂きたい。王氏の情熱によって、小川尚義が終生かけて編纂した『台日大辞典』が今ここに再び息を吹き返したことは中国方言学のみならず、台湾研究の今後の発展にとり、誠に慶賀すべきことである。